

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 8 日現在

機関番号：34310

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370531

研究課題名(和文)蜻蛉日記全用語全事例辞典の作成にかかる基礎的研究

研究課題名(英文)Compilation and Investigation of KageroNikki Lexicon with All Instances

研究代表者

石井 久雄 (ISII, Hisao)

同志社大学・文学部・教授

研究者番号：70124188

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：『蜻蛉日記』の全自立語について、それぞれ、どのような意味用法がどれほどの分量で使われているか、全事例を一覧しながら知ることができる辞典を作成しようとして、その基礎を形成した。すなわち、おおかたの用語・事例について意味用法を記述し、一語における偏りを見るなどした。用語相互で記述を整合させたり、全体の意味用法の記述のしかたを理論的に整理したりなど、今後、他の作品も見合わせながら、辞典編集を進めたい。

研究成果の概要(英文)：We have attempted to compile the lexicon of "KageroNikki: Diary of a Japanese Noblewoman in 10th Century" with all instances, and described the meaning of each instance, so could observe the semantic frequency in each word. Now we will consider the syntactic features etc. and solve such basic problems as the setting and the counting of the word meaning.

研究分野：日本語学

キーワード：語彙・意味 辞典 全用語 全事例 蜻蛉日記

## 1. 研究開始当初の背景

語彙研究において、どのような語がよく使われるか、あるいは希であるかということは、検討が進んでいる。しかし、語は意味が必ずしも単一でなく、よく使われる語は意味が多様であって、どの意味でよく使われるか、あるいは希であるか、ということも、問われるべきである。この問題はかねて認識されてきていたが、意味の基準が設定しにくく、しかもよく使われるほうの語が取り上げられるべきであって処理量が多くなる、といったことのために、研究が進まなかった。

われわれは、科研費挑戦的萌芽研究 JSPS 20652033「古典文芸作品の用語の語義別出現頻度に関する調査研究」(2008～2009年度、研究代表者石井久雄)で、この問題に積極的に取り組み始めた。この研究からは、宮島達夫・他編『日本古典対照分類語彙表』(笠間書院、2014年。以下『古典語彙表』)として一つの結実を得つつ、なお、文芸作品それぞれに即して語の意味用法を精細に記述する必要があると、新たな問題を実感するに至った。科研費基盤研究(C) JSPS 22520478「とはずがたり全用語全事例辞典の作成にかかる基礎的研究」(2010～2012年度、研究代表者石井久雄)は、その問題の一展開である。

『とはずがたり』を取り上げたのは、『古典語彙表』の諸作品と重ならないところに問題を展開しようとしたためである。しかも、そこで新たに現れる諸問題に対処するためには、『古典語彙表』にあっても対比しうる作品について、並行して検討するのがよいと考えられる。すなわち、『とはずがたり』と同様に、女性貴族の自身の心理を豊かに描写し、語彙量も適当に大きいという点で、『蜻蛉日記』の辞典を構想することは、適当である。『蜻蛉日記』は『源氏物語』の表現に影響を与え、『とはずがたり』は『源氏物語』に強く影響された、という点で、古典語の中核の形成・展開にかかわることになる。

## 2. 研究の目的

『蜻蛉日記』の全自立語について、それぞれの意味用法を整理し、その意味用法ごとに、全事例を文脈とともに一覧する、という辞典を作成する。よく出現する意味用法と希なものとの簡明に見通すことができるように、意味用法ごとの出現頻度も示す。このような辞典は、上記1のとおり、言語研究、特に語彙・意味研究にとって、必須の用具であるが、前例を見ない。最初の例外として試みたものが『とはずがたり』の辞典であって、なお編集中であり、意味用法の設定のしかた、事例の脈絡の取り込みかたなど、この『蜻蛉日記』の辞典と影響し合うことになる。

## 3. 研究の方法

次のように研究・作業を進めた。

(1) 『蜻蛉日記』の本文は、木村正中・伊牟田経久校注・訳『土佐日記 蜻蛉日記』(小学館、新編日本古典文学全集 13、1995年)により、用語の意味用法の解釈についても、同書の注釈および現代語訳を尊重する。

(2) 自立語を漏れなく取り出すために、全文を文節に区切って整理する。意味用法を逐一見る便宜のために、前後の文脈を添えた一覧とする。この作業はコンピュータ上で行い、つまり KWIC を作成する。自立語の延べすなわち全事例数は 23,100 余であり、異なりすなわち辞典の見出し数は『古典語彙表』によれば 約3,600 が見込まれる。

意味用法の記述は、最初の段階では KWIC に書き加える形で進める。その後、KWIC と辞典原稿との間を行き来するが、完成に至るまで、作業は全般的にコンピュータ上で行うことになる。完成した辞典も、一次的にはコンピュータ・ファイルとして提供する。

(3) 年次順の処理としては、第1年次に KWIC を作成し、意味用法の記述に着手する。取り上げる語は、意味用法が処理しやすい頻度数十のもの、およびその派生・複合・類義・共起などで関連する語である。第2年次には、大頻度の語などを取り上げて、意味用法を記述する。分量としては、異なり・延べとも半数以上とする。第3年次は、頻度順ないし五十音順で次つぎに取り上げるといった処理も行う。担当する人員は、研究代表者のほか、多く大学在職および大学院在学の研究協力者である。

意味用法の整理にどのような方法がありうるかといった、辞典における記述の検討は、第3年次に行う。人員は研究代表者である。

研究期間の全般を通して、また期間終了後も、研究に関係した者は、気づいたことを随時論文等にまとめる。

(4) 辞典を作成するための基礎は、この研究でまとめる。しかし、目標は辞典そのものの作成であり、原稿執筆・編集などに今後相当の時日を必要とする。

(5) なお、辞典の理念を考えるうえで大いに参考となったものとして、各作品の全用語を取り上げた辞典3点がある。佐々木信綱『万葉集事典』(平凡社、1956年)、北山谿太『源氏物語辞典』(平凡社、1957年)、秋山虔・室伏信助『源氏物語大辞典』(角川学芸出版、2011年)である。

#### 4. 研究成果

辞典本文の例を挙げる。辞典では事例をすべて掲げ、前後の脈絡を適量で示すが、ここでは事例も脈絡も省略ないし最小限に止める。事例前に『蜻蛉日記』の上中下巻 I～III・巻末歌集IVおよび木村・伊牟田『土佐日記 蜻蛉日記』のページ・行を入れ、○が見出しの語である。〈〉内は注記であるが、主語や話し手・話し相手が道綱母であるものは、注記しない。≫ 以下は、辞典には記さないが、この辞典作成ないし研究遂行の意義にかかわるものとして、本報告のために記す。

##### (1) 「ものす」

ものす 〈物〉動詞、サ行変格活用。する。

##### 229例

種類の意味用法があり、具体的にどのような行為であるかという意味内容は脈絡に支えられる。書状のうちにも、発話のうちにも、地にも見られ、ただ、和歌には見られない。

蜻蛉日記を特徴づける一語である。古典語彙表によれば、蜻蛉日記で出現順位12＝上位0.33%であり、キルガリフの特徴度で第1位である。

≫ このような説明を適宜加える。なお、上の229例がこの語の頻度であり、古典語彙表などでも知られるが、多様な意味のうちで「来る」「行く」「書き送る」「言う」が多く使われることは、下の事例数で初めて確認される。

##### 1 来る。 46例

##### 1・1 発話者のところに来る。38例

到着点は「…に」で示される。また、「…に」で「…のために」を意味する事例がある。

≫ 構文についての情報は、気が付いたところを示す。到着点を「…へ」とする「ものす」は2・2の1例のみである。

I 094.12 あるやうありて、しばし旅なる

ところにあるに、〈兼家が〉○ものして、

I 138.13 〈兼家の指示〉「とく渡りね。こ

こに〈兼家自身が〉○ものしたり」

II 188.14 〈兼家の発話〉「これ〈道綱〉がい

とらうたく舞ひつること〈兼家自身が〉語

りになむ○ものしつる。…」

##### 1・2 帰って来る。 4例

II 188.12 夜更けて、送り人あまたなどして

〈道綱が〉○ものしたり。

##### 1・3 参籠から下山する。 4例

II 250.01～02 〈父の発話〉「…はやなほ○

ものしね。今日も日ならば、もろともに

○ものしね。…」

≫ 到着点で特別のものをまとめた。この事例では「行く」に組み込むのがよいとも考えられる。2・5参照。

##### 2 行く。 58例

##### 2・1 訪ねて出かける。 34例

I 127.08 ほど経て河原へ○ものするに、

〈兼家と〉もろともなれば、

##### 2・2 帰って行く。 5例

I 140.03 〈兼家の発話〉「…なにごともせむに、いと便なかるべければ、かしこく兼家自身の邸へ○ものしなむ。…」

≫ 「…へものす」の唯一の事例である。

##### 2・3 出立する。 3例

III 345.09 「はやう〈叔父のところ〉に○ものせよ。ここには〈叔父に〉来られてもな

にせむに」とて〈道綱を〉出だし立つ。

##### 2・4 到り着く。 3例

I 139.03 昨日今日は関山ばかりにぞ〈姉

が〉○ものすらむかしと思ひやりて、

##### 2・5 参詣・参籠に出かける。 13例

I 126.01 せばどころのわりなく暑きころ

なるを、例も○ものする山寺へ登る。

≫ 「…へものす」は希であるが、助詞

「へ」は、この「登る」に対してのよう

に、他に現れている。

##### 3 存在している。状態である。 9例

III 322.11 その寮の頭、〈道綱の〉叔父にさ

へ○ものしたまへば、まうでたりける、

III 322.12～13 「殿〈道綱母邸〉に○ものした

まふなる姫君は、いかが○ものしたま

ふ。いくつにか、御年などは」と〈道綱

に叔父が〉問ひけり。

##### 4 書状として書いて送る。 35例

##### 4・1 目的語「文」「返りごと」が

明示される。 12例

II 200.08 〈兼家からの書状〉「文○ものす

れど、返りごともなく、…」

III 327.09 さて、返りごと、今日ぞ○もの

する。

##### 4・2 動詞「書く」などが先行し、

送る意味が強い。 6例

II 203.04 〈兼家への返書を〉「…」と書き

て、○ものしけり〈兼家からの使いに持

たせてやった〉。

##### 4・3 目的語も動詞もなく、書状の

引用を受け、書き送る意味を担

う。 17例

III 283.11 「…」など○ものしたれば、ま

たの日、返りごとあり。

##### 5 歌を詠んで送る。 14例

##### 5・1 送ることを前提として歌を詠

む。 12例

歌は、副詞「かく」で後行させるか、引

用「…と」で先行させるかである。

I 119.15 〈兼家から〉使ひあれば、かく○

ものす。〈歌〉

II 174.01 返りごとに、〈歌〉と○ものした

るところに、さらに〉返し、〈歌〉と言ふ

ほどに、

≫ 「ものす」で歌を詠むのは、誰かに

送るのが通常であると知られる。ここの

第2例の「言ふ」との対応からは、歌を

詠むことの、形式張らない日常性が窺わ

れる。

##### 5・2 送る意味をもたない。 2例

〈屏風歌を依頼されて〉宵のほど、月見る

あひだなどに、一つ二つなど思ひて○ものしけり。〈絵の説明および歌9首〉

6 物を送り届ける。 5例

III 271.02 〈兼家から頼まれた袍を仕立て〉これより文もなくして○ものしたれば、

7 言う。 21例

7・1 口頭で話す。 17例

I 111.01 これかれ〈周囲の人が〉「いと情なし、あまりなり」など○ものすれば、

7・2 口頭か書状かにかかわらず、意向を伝える。 4例

III 340.10 〈兼家からの書状〉「〈道綱母の養女の婚儀について相手に〉程はさ○ものしてしを、〈その相手は〉などかかくは〈早めよう〉とあらむ。…」

8 する。執り行う。 13例

I 131.14 かくて、とかう○ものすることなど〈母の葬儀のことなど〉、いたつく人多くて、みなしはてつ。

9 そのほか 18例

9・・ 乗る。 2例

I 141.05 〈兼家が〉こちいと重くなりまきりて、車さし寄せて乗らむとて、かき起こされて、人にかかりて○ものす。

9・・ 出産する。 2例

I 099.10 春、夏、なやみ暮らして、八月つごもりに、とかう○ものしつ。

9・・ 食べる。 2例

I 165.01 としみに〈精進落とし〉のまうけありければ、とかう○ものするほど、

9・・ 用意する。 2例

II 171.03 三月三日、節供など○ものしたるを、人〈客〉なくてさうざうしとて、

9・・ 裁縫する。 1例

II 192.09 〈兼家に仕立てを頼まれたが、〉「このごろ、○ものする者ども里にてなむ」とて返しつ。

9・・ (省略) 各1例 合計 9例

「…などものす」…を使う。 7例

副助詞「など」がすべてに見える。

II 205.02 走り井にて、破子など○ものす〈弁当を食べる〉とて、幕引きまはして、とかくするほどに、

III 354.06 宵のほど、火ともし、台など○ものしたる〈食事をする〉ほどに、

II 206.08 夜になりて、湯など○ものして〈湯などで身を清め〉、御堂に上る。

II 248.03 〈道隆は〉歩み出でて、高欄におしかかりて、まづ手水など○ものして〈手などを洗って〉入りたり。

「ものすべきこと」用事。 3例

主語として述語「あり」「侍り」に係する。

III 348.04 〈道綱の叔父の発話〉「つとめて、寮に○ものすべきことはべるも、…」

→ ものしおく〈物置〉1例  
ものしやる〈物遣〉1例

(2) 「ものす」の周辺から

ものし〈物〉形容詞、シク活用。不愉快である。気分が沈む。 10例

1 事態について不快感をもつ。 9例

1・1 述語となる。 7例

事態は副詞節で示される。

I 129.02 あはれなるさまのことども兼家と語らひてもありしころ思ひ出でられて、○ものしければ、

1・2 感情を示す動詞に引用される。 2例

事態は、動詞の目的語・主語で表される。

I 107.01 人兼家につきて人びとが聞こえごつを聞くを、○ものしうのみおぼゆれば、日暮はわびしうのみおぼゆ。

2 感情・気分の状態が悪い。 1例

II 176.09 〈兼家が〉たはぶれにも御気色の○ものしきをば、〈道綱は〉いとわびしと思ひてはんべめるを、

ものしおく〈物置〉動詞、四段活用。話してある。 1例

III 285.06 〈道綱母が〉「身の心細さに、人の捨てたる子をなむ養子に〉取りたる」など○ものしおきたれば、〈兼家が〉「いで見む。誰が子ぞ。…」とあるに、

ものしげ〈物〉形容動詞、形容詞「ものし」からの派生。 1例

II 214.12 〈道綱母が〉几帳引き寄せて、気色○ものしげなるを兼家が見て、

ものしやる〈物遣〉動詞、四段活用。人を遣って言う。 1例

II 231.15 京自邸へ○ものしやるべきことなどあれば、人出だし立つ。

(3) その他

うりわりご〈瓜破子〉瓜の形をした弁当箱。 1例

「わりご」は容器であり、直後に「筥」と言い換えられ、彫金するとも言われる。

IV 375.10 〈詞書〉銀の○瓜破子をして、院に兼家が奉らむとしたまふに、「この筥にうたむ」とて、

→わりご〈破子〉7例

わりご〈破子〉弁当。 7例

>> 意味用法よりは、観点によって下に分けるが、動詞との関係などでも違う。

1 食べるものとして。 3例

副助詞「など」を伴い、食べることは動詞「ものす」による。

II 205.02 走り井にて、○破子などものすとして、幕引きまはして、とかくするほどに、

2 持ち運ぶものとして。 4例

配るものや、多量にあるものでもある。

II 195.02 「ここにて○御破子待ちつけむ。かの崎はまだいと遠かめり」

II 195.05 ○破子もて来ぬれば、さまざまあかちなどして、

→うりわりご〈瓜破子〉1例

## 5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計5件)

- ① 石井久雄,  
蜻蛉日記全用語全事例辞典 起稿,  
同志社日本語研究, 査読無, 20号, 2016,  
pp. 1-18  
<https://doors.doshisha.ac.jp/duar/repository/ir/>
- ② 入江さやか,  
『蜻蛉日記』における「聞こゆ」「申す」の意味・用法 —— 『とはずがたり』との比較,  
同志社日本語研究, 査読無, 20号, 2016,  
pp. 19-30  
<https://doors.doshisha.ac.jp/duar/repository/ir/>
- ③ 森あかね,  
『とはずがたり』における名詞「すゑ(末)」の意味・用法 —— 『蜻蛉日記』との比較から,  
同志社日本語研究, 査読無, 20号, 2016,  
pp. 31-41  
<https://doors.doshisha.ac.jp/duar/repository/ir/>
- ④ 城阪早紀,  
『蜻蛉日記』における名詞「め(目)」の意味用法,  
同志社日本語研究, 査読無, 20号, 2016,  
pp. 42-53  
<https://doors.doshisha.ac.jp/duar/repository/ir/>
- ⑤ 入江さやか,  
『とはずがたり』における「思ひ」の意味・用法 —— 『蜻蛉日記』と比較して,  
同志社国文学, 査読有, 84号, 2016,  
pp. 282-270,  
<https://doors.doshisha.ac.jp/duar/repository/ir/>

[学会発表] (計2件)

- ① 石井久雄,  
古典語彙の出現頻度の分布 —— 『日本古典対照分類語彙表』を利用して,  
語彙研究会 第100回定例研究会,  
2014年5月24日,  
愛知学院大学大学院サテライト(愛知県名古屋市)
- ② 石井久雄,  
多義語における意味の出現の定量,  
計量国語学会 第五十七回大会,  
2013年9月28日,  
首都大学東京秋葉原サテライトキャンパス(東京都千代田区)

[図書] (計1件)

- ① 宮島達夫, 鈴木泰, 石井久雄, 安部清哉,  
笠間書院,  
日本古典対照分類語彙表,  
2014年, 1147頁およびCD1枚

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

石井 久雄 (ISII, Hisao)  
同志社大学・文学部・教授  
研究者番号: 70124188

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号:

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号:

### (4) 研究協力者

入江 さやか (IRIE, Sayaka)  
同志社大学・文学部・嘱託講師  
研究者番号: 10580748

石田 裕子 (ISHIDA, Hiroko)  
同志社大学・  
日本語日本文化研究センター・嘱託講師  
研究者番号: 00580820

牧野 さやか (MAKINO, Sayaka)  
大谷高等学校(大阪市)・常勤講師

丸山 健一郎 (MARUYAMA, Kenichiro)  
同志社大学大学院・博士後期課程・学生

森 あかね (MORI, Akane)  
同志社大学大学院・博士後期課程・学生

吉岡 真由美 (YOSHIOKA, Mayumi)  
同志社大学大学院・博士後期課程・学生

城阪 早紀 (KISAKA, Saki)  
同志社大学大学院・博士後期課程・学生